体育授業における痛みの経験の現象学的考察

－身体と世界の関係に着目して－

中野　大希（筑波大学大学院）

１．目的

本研究の目的は、体育授業における痛みの経験が、児童・生徒にとって有している意味を明らかにすることである。なお、本研究でいう「体育授業における痛み」とは、例えばサッカーの授業でボールを蹴った時に生じる、一瞬の痛みを指しており､怪我に付随して生じる痛みとは区別される。

２．問題の所在と研究の方法

体育授業における痛みの経験が有する意味は、これまで十分に議論されていない。それにもかかわらず、今日の体育授業では、痛みを経験する機会が排除されつつある。しかし、その経験の意味を明らかにしなければ、痛みが体育授業において不要と判断することはできない。それゆえ、本研究は痛みの経験が有している意味を探求することを試みる。なお、痛みは、それを感じる本人のみが経験する事象であるため、本研究では、事象を一人称視点から捉える現象学的方法を用いる。

３．本論の概要

児童・生徒の生きる体育授業は、空間的および時間的な広がりが浸透し合った知覚的な世界である。しかし、彼らが痛みを感じると、児童・生徒にとっての空間的および時間的な広がりは消失する。つまり、痛みによって、彼らは体育授業という世界との関係を保てなくなる。

ただし、一度その関係が遮断されると、児童・生徒の身体は、生きていた体育授業に安定して生きようとする、すなわち住み込もうとするのである。このことは、痛みによる体育授業との関係の遮断を契機に、児童・生徒の身体が、体育授業に新たに住み込む身体に変容することを意味する。

そのような身体の変容によって､児童･生徒は、事物や他者を、意味をもったものとして知覚できるようになる。だからこそ、例えばある生徒がハードルにつまずいて転倒し、痛みを感じると、その生徒にとってハードルが壁として現れてきたり、いつも以上に高く見えたりするのである。

さらに、ハードルがそのように意味をもつと、生徒は、ハードルを跳ぶ直前に止まってしまうことがある。このことから、事物や他者が意味をもつということは、児童・生徒の身体が、事物や他者に応じて動くように、それらに働きかけられることでもあると考えられる。つまり、痛みの経験は、児童・生徒が事物や他者と相互に働きかけ合う、すなわち、かかわり合うことを可能にしているのである。そのかかわり合いができなければ、痛みを先天的に感じられない人が、事物や他者に対して過度に強い力で触れてしまうように、他者に触れることさえ､適切に行うことが困難となる。したがって、体育授業における痛みの経験は、児童・生徒が事物や他者と適切にかかわるための基盤を形成しているのである。

４．結論

本研究では、体育授業における痛みの経験は、児童・生徒が事物や他者と相互にかかわり合うことを可能にしているという意味を有することを明らかにした｡この結論に基づくと､痛みの経験は、必ずしも体育授業から排除されるべき対象ではなく、むしろ児童・生徒が豊かな学校生活を送ることを支えていると考えることができる。

５．主要参考文献

１）メルロー＝ポンティ，M.：竹内芳郎・小木貞孝訳（1967）知覚の現象学Ⅰ．みすず書房.
２）メルロー＝ポンティ，M.：竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳（1974）知覚の現象学Ⅱ．みすず書房.
３）瀧澤文雄（1995）身体の論理．不昧堂出版.